小さくなった洋服、動態としての自我

——山田詠美『賢者の皮むき』の授業——

白瀬浩司

一

高校三年生の教室は、あわただしい。

所謂（いわゆる）「子供以上、大人未満」の年代にある生徒たちも、否応なく自身の進路選択を迫られる時期を迎えた。夏から秋にかけて、彼らが何かにせき立てられるようなすわりの悪さを感じている時、担任である私のほうは調査書や指定校推薦入試・公募制推薦入試の推薦書の記入に追い立てられる。そして、夏期補習、三者面談、学園祭、体育大会といった学校行事も目白押しであり、同時に平常授業や定期考査——彼らは、さらに所謂「受験勉強」——もこなしていかねばならないというのが、お互いをめぐる教室の現実としてある。

「自身の関心や適性に合った大学（学部）や専門学校、あるいは職業を選ぼう。」といった型通りの言説が「進路指導」の名のもとに声高に叫ばれるのもこの時期の常である。しかしながら、同一年齢人口の九割以上が高校へ進学し、その半数以上がさらに高等教育を受けるという状況になって久しい。そんな中で、教員が信じるほど「自身の関心や適性」が進路決定の有効な基準たりえているのだろうか。例えば、私の勤務校①でも、普通科四十名のクラスにおける四月段階での進路希望調査では「大学進学」と明記する生徒がほとんどである。結果的に大学進学者は約半数ほどになるものの、それは「関心や適性」によって導き出されてきた数字とは言いがたい。

ともあれ、関心や適性をも含めて自身を捉え返す（あるいは自分を知ろうとする）作業の必要は、こうした進路決定の場面に限らず、また十代の生徒たちの一過的な課題にとどまらず、不断に私たちの前に横たわっているような気もする。

だいたい、高校生である状態から高校生でない何者かになること

を選び取っていかねばならぬというのは、あくまでも世間的な（あるいは制度上の）外皮――それに即した行動をとることが様々な関係性を円滑化するために必要であり、そして時にそのほうが楽であることも、私たちは知っている[2]――の張り替えの問題に過ぎまい。彼ら個々にとって高校生という外皮をまとった自分が、その実、いかなる自分であるかは必ずしも分明ではない。何者かになることのできる自分？　いやその前に、現在の自分はいかなる自分であるのか、話はそこから始めるしかないだろう。しかし、その答えもまた容易に導き出される類のものでないことは、無論、生徒たちだって感得している[3]。そして、繰り返しになるが、このことは、教員である私（あるいは大人である私たち）にとっても、おそらくは彼らにとってと同様、常に終わらない問いかけなのだ。

本稿では、一九九六年度に担当した高三・普通科「現代文」（四単位）の四月当初における授業実践（全六時限）について、まとめておくことにする。同年度は《「他者との関係性」と「個体（生命）の尊厳」の発見》ということを年間テーマに据えた上で、（教材選定や教材配列をも含め）一年間の授業を展開してきた[4]。

『賢者の皮むき』は、『新潮』（一九九二年十二月号）に発表され、後に単行本『ぼくは勉強ができない』（新潮社、一九九三年）に収載されている。授業のテキストには、単行本収載本文をワープロで打ち出してプリント化したもの（B4用紙縦・33字×36行×上下2段）を用いた。また、例のごとく、授業時にはプリント化した本文を最初にすべて配布して通読するといった作業は行わず、一時限にプリント[5]を一～二枚ずつ配布して読解に取り組むという形態[6]をとっている。

この授業の第一時限目は、《オレの、みんなと違うオレらしいところ》と題して自己紹介を行うことから始めた。この題目を板書した後、一人ずつ教壇に立ってクラスメイトたちに向き合い、一分間の自己紹介をしてもらう旨、説明した。もちろん、手始めは私からで、概ね、次のようなことを語っている。

> オレは、いま学校の先生してるけども、実は学校が嫌いです。高校時代にはぼろぼろに落ちこぼれてました。でも、ヤンキーちゃうで！　根性なかったしな。ほんで、先生っちゅうのんは欠勤とか遅刻とかせえへん印象があるもんやけど、休むし、職員朝礼にはよう遅刻するしなあ。あと、職員室にトモダチがいてへんから、自分の席には滅多におらへん。まあ、みんな知ってるやろけど、授業の合間の休み時間はいっつもオマエらの教室をうろうろしてます。せやけど、昼休みや放課後は、自習室でウダっとる時以外、オマエらには滅多に捕まらへん。いったい何処へふけてんのか？　発見したヤツにはコーヒー一杯おごったんで！

後に続いた生徒たちの自己紹介は、彼らの意外な一面や意外な趣味が披瀝され、私が想像していた以上に面白かった。実を言うと、当初、私は始業後の十五分程度で短冊（五十字原稿用紙）に自己紹

介を書いてもらい、それをプリント化して後日配布するというかたちを考えていた。教室に入って、急遽こういう展開に切り換えたわけだが、いま思えば、彼らに書いてもらったほうが手許に残っただろうに……と少々残念ではある。とはいえ、年間授業展開の中で随分書く作業を課すことになるし、国語教室の雰囲気づくりを考えると、生徒たちが一人残らず肉声で語るという場面が必要だという判断もあった。

もちろん、自分をうまく語れない生徒や語りたくない生徒のいることは言うまでもない。それでも、とりあえず自己紹介の順番が迫ってくる中で、一時的にではあれ、〈人と違うオレらしさ〉ということが教室の構成員個々の脳裡をよぎったテーマであったことだけは確かである。そして、その個々の考えた〈オレらしさ〉は、『賢者の皮むき』を読み進めていく過程で、同世代の主人公・時田秀美の次のような言葉と出喰わすことになる。これが、今回の授業において、私の準備した第一の〈仕掛け〉であり、生徒たちは、共感するにせよ反撥するにせよ、作品の主人公と向き合うことを余儀なくされたはずである。

ぼくを、川久保たちのような平凡な嗜好を持つ者と思わないで欲しい。ぼくは、そう感じて苛立ったが、すぐ後で、平凡な嗜好などという言葉を思いついた自分自身を少し恥じた。自分が非凡であると意識することこそ、平凡な人間のすることではないか。

右の内言には、平凡な言葉の想起を恥じつつも、却って自身の非凡性を強く信ずる主人公の自意識が垣間見えている。この「他の人とは違う何か特別なものを持ってる」という「優越感」こそが、自身の抱いている「窮屈」感や「居心地悪」さと通底するものであったことに、周囲の人々との対話を通じ、主人公はやがて気づいていく。

二

『賢者の皮むき』は、時田秀美の次のような問いかけから始まる。

Ⓐ どの学年にも、とび抜けて容姿の良い女の子たちが二、三人いて、ベストスリーだなどと呼ばれるものだ。彼女たちは、たいてい、清潔感にあふれていて、愛らしい顔をしている。自分の魅力に気付いていないわ、というような初心な表情を浮かべながら、磨きたてたうなじを何かの拍子に、ちらりと見せたりする。手を抜いてないなあ。ぼくは、彼女たちを見るたびに、そう心の中で呟く。と、いうのは、一度、口に出して言った時に、まわりの奴らに咎められてしまったのだ。手を抜いてないなどというのは誉め言葉などではない、と彼らは言うのだ。彼女たちは、生まれつき、あのように美しいのだと思いたいのだろう。しかし、本当に、そうだろうか。

クラスの「美少女」である山野舞子に、秀美の友人である川久保もまた「まわりの奴ら」の一人として、夢中になっていた。一方、

秀美は、脛毛の手入れから授業中に指名されて見せる「可愛いとちり方」（「お茶目さん」の「演技」）や日常の仕草（様々な「媚」態）に至る彼女のあらゆる「努力」を「誉めたたえてあげたい」と認めつつも、彼女の「自然過ぎる」ことを「腑に落ちない」と感じ、彼女に対する不快と嫌悪をはっきりと自覚している。

Ⓑ　初心に見える女は、本当は初心じゃないのよ。（中略）実は、ぼくも、そう思い始めている。初心な女だけに限らない。近頃、色々なものが、ぼくの瞳には、見せかけと中味が違うように映るのだ。疑心を深める季節なのだろうか。人は、ぼくをひねくれ者とも呼ぶけれど。

Ⓒ　ぼくは、確かに、山野舞子に象徴される何かを憎んでいる。蒸し暑い季節のせいだろうか。梅雨の湿度は、ぼくの邪魔にはならない。しかし、ぼくの内側には、取り除いてしまいたい不快なものが張り付いて、心との隙間に不協和音を生んでいるのだ。

秀美はまた、同世代である高校生の男の子たちの中にあって、「窮屈」や「居心地悪」さを感じ、苛立ちを覚えていた。そのことに彼自身が改めて気づくのは、母に頼まれて皮剥き器で野菜のスライスを作りながら対話していた時のことである。その原因が周囲にではなく、自分の内にあることを、漠然とではあるが、彼は捉えてもいた。

Ⓓ　しかし、皮剥き器は賢い。ぼくは、野菜を削る音が、心地良く耳を震わせるのに夢中になった。／「なんか、欲求不満の解消になるじゃん。これってさ」／「欲求不満？　何それ？　いったい、どんな欲求が溜まってるのよ。肉体方面？　それとも精神状態？」／ぼくは、返答に困って母を見た。解消されていない欲求を、ぼくは溜めていたのか、と改めて思った。／「良く解らないんだけどさ、なんだか最近、苛々するんだよね。（中略）なんか、周囲と自分が噛み合ってないっていうか。自分だけ浮いてるように感じちゃうんだよな、ぼく」／「それ、昔からじゃない」／「子供の頃と違う感じなの。子供の頃は、皆の仲間に入りたくても入れないっていうもがいてる感じがあったんだけど、今は違う。ちゃんと、良い仲間に囲まれてるもん。なんか、上手く言えないんだけど、窮屈なんだ。自由にしてるんだけど、居心地悪いんだ。それも、誰のせいでもなく、自分のせいでそうなんだ。それが解ってるから発散出来ない」／「お洋服が小さくなっちゃったかな？」

母親の最後の言葉は、「たとえ話」としてそのまま片付けられてしまうものの、秀美の状況を端的に言い当てている。秀美の捉えどころのない「窮屈」感、自由に振る舞いながらも感じる「居心地悪」さの本質が、彼の成長に伴い、心が別の「皮」を必要としていること――まさに「お洋服が小さくなっちゃった」こと――にあるのを、母親らしい視点で的確に見据えていたのである。秀美の内にある「取り除いてしまいたい不快なもの」とは、彼がいま身にまとっている「皮」であり、まさに、小さくなった「お洋服」なのであった。皮剥き器で野菜を削る「心地良」さは彼を夢中にさせたが、それはおそらく自身の皮を削り取っていくことと遥か遠くで響き合う代償行為的な快感であったに違いない。しかし、この時の秀美は、

まだその意味を感得するに至ってはいなかった。母との対話の後に織り込まれた内言――「ぼくは、自分の濡れた手を見詰めながら、この時間に、皮剥き器を握っている高校生は、世の中に何人いるだろうかと考えた。」――に、前章で引いた「ぼくを、川久保たちのような平凡な嗜好を持つ者と思わないで欲しい。」の箇所と同様の自意識を看取することができるだろう。

その翌朝、秀美は友人の川久保から、山野舞子に恋心を告白するという決意を伝えられる。川久保の「髪の毛は、ムースで綺麗に立てられ、彼の気合の入れようを物語っていた」が、秀美は「手を抜かないというのは、そのやる気を隠す段階まで進むこと」であり、「あまりにも、やる気をみなぎらせて」いる川久保が山野に「追い付いていない」と分析する。

Ⓔ「無理なんじゃねえの」／「駄目でもともとだよ。彼女、ついに、バスケットボール部の仲本と別れたんだって。その後、ねらってる奴、すげえ多いと思うんだよね。先を越されないようにしなきゃ。おれ、今日、言う」／「ふうん。仲本とできてたの。川久保、彼女、背の高い男が好きなんじゃないのか？　止めとけば？」／「背の高さで男の価値は決まらないよ」／決まると思うけどなあ。ぼくは、そう思ったが、川久保の真剣な様子に恐れをなして口には出さなかった。背が高いというのは男の価値を上げるのに有効である。特に、山野舞子のような女の子にとっては。

彼の分析によれば、「特に、山野舞子のような女の子」は、「背が高い」という「男の価値を上げる」外的要素を持ち合わせた相手を――自身の「演技」としての「美少女」性を彩るための脇役あるいはパートナーとして――選ぶということであろう。この時の秀美は、「美少女」に群がる「まわりの奴ら」のみならず、当の「美少女」である山野の性向すらも、すべて見透かしているとでも言いたげな口ぶりである。

放課後、「勇気が、どうしても出ない」という川久保に代わって、秀美は彼の思いを山野に伝える破目になった。その際、彼女が川久保と付き合えないのは、秀美のことが好きだからだと逆に告白され、困惑してしまうのだが、ハンカチで涙を拭う山野の姿を目のあたりにした彼は、こう感じている。

Ⓕ 確かに彼女は美少女だ。それは認める。しかし、その下で噛まれた唇に演技があるとぼくは感じた。白い小さな歯は、計算されたように唇を押している。媚びているじゃないか、こいつ。ぼくは途端に不快になった。ぼくは、衝動が肉体を動かすのと、作為が肉体を使うことの間にある差というものに非常に敏感な自分に、その時、気付いた。

Ⓖ これなら、どんな男も夢中になるだろうと、ぼくは思った。彼女のすべては、無垢な美しさに満ちている。けれど、この世の中に、本当の無垢など存在するだろうか。人々に無垢だと思われているものは、たいていい、無垢であるための加工をほどこされているのだ。白いシャツは白い色を塗られているから白いのだ。澄んだ水は、消毒されているから飲むことが出来るのだ。純情な少女は、そこに価値があると仕込まれている

から純情でいられるのだ。もちろん、目の前の女の子は美しい。そのことに疑いの余地はない。けれど、何かが違うのだ。ぼくの好みではない何かが、彼女の美しさを作っているのだ。

作品冒頭の問いかけ（引用Ⓐ）がここでも反芻されている。ただし、この対話の場面では「山野舞子に象徴される何か」に対する不快と嫌悪が、「手を抜いてないなあ」とこれまで秀美自身が一定評価してきた、まさにそのことに向けられていた点に彼は気づく。「衝動が肉体を動かすのと、作為が肉体を使うこと」の二分法で言えば、山野の「美しさを作」っている「努力」は後者に属するものであった。

Ⓗ「山野さん、自分のこと、可愛いって思ってるでしょ。自分を好きじゃない人なんている訳ないと思ってるでしょう。でも、それを口に出したら格好悪いから黙ってる。本当はきみ、色々なことを知ってる。物知りだよ。人が自分をどう見るかってことに関してね。高校生の男がどういう女を好きかってことについては、きみは、熟知してるよ。完璧に美しく、けれども、完璧が上手く働かないのを知ってるから、いつも、ちょっとした失敗と隣合わせになってることをアピールしてる。確かに、そういうきみに誰もが心を奪われてるよ。だけど、ぼくは、そうじゃない。きみは、自分を、自然に振る舞うのに何故か、人を引き付けてしまう、そういう位置に置こうとしてるけど、ぼくは、心ならずも、という難しい演技をしてるふうにしか見えないんだよ」

Ⓘ「ぼくは、人に好かれようと姑息に努力する人を見ると困っちゃうたちなんだ。ぼくの好きな人には、そういうとこがない。ぼくは、女の人の付ける香水が好きだ。香水よりも石鹸の香りの好きな男の方が多いから、そういう香りを漂わせようと目論む女より、自分の好みの強い香水を付けてる女の人の方が好きなんだ。これは、たとえ話だけど」

結局のところ、作品の冒頭からこの発言に至るまで、秀美の自意識と他者分析は一貫していたと言えるだろう。しかし、それは、秀美の頬を叩いた山野の次の発言によって、一挙に反転して彼自身に厳しく突きつけられていく。

Ⓙ「何よ、あんただって、私と一緒じゃない。自然体っていう演技してるわよ。本当は、自分だって、他の人とは違う何か特別なものを持ってるって思ってるくせに。優越感をいっぱい抱えてるくせに、ぼんやりしてる振りをして。あんたの方が、ずっと演技してるわよ。あんたは、すごく自由に見えるわ。そこが、私は好きだったの。他の子たちみたいに、あれこれと枠を作ったりしないから。でもね、自由をよしとしてるのなんて、本当に自由ではないからよ。私も同じ。あんたの言った通りよ。私は、人に愛される自分てのが好みなのよ。そういう演技を追求するのが大好きなの。中途半端に自由ぶってんじゃないわよ」

Ⓚ「ふん。それから、つけ加えておくけど、私が川久保くんとつき合えないのは、彼の背が低いからじゃないからね。私、髪に、ムース付けるような男、大嫌いなの。口開けて、女に見とれてるような男もね」

秀美の反芻してきた問いかけは、まさに彼が抱いていた「窮屈」感や「居心地悪」さと表裏一体のものであり、自分もまた「自由」という「演技」あるいは「自分自身に対する媚」を身にまとっていたことに秀美は気づかされる。彼が山野に対して抱いてきた不快感

はある種の同属嫌悪であり、彼の「窮屈」感は自身の内なる山野的なるものをその因としていたのであった。ついでながら、秀美による先の山野分析もまた完全に覆されている。

Ⓛ　ぼくは、媚や作為が嫌いだ。そのことは事実だ。しかし、それを遠ざけようとするあまりに、それをおびき寄せていたのではないだろうか。人に対する媚ではなく、自分自身に対する媚を。／人には、視線を受け止めるアンテナが付いている。他人からの視線、そして、自分自身からの視線。それを受けると、人は必ず媚という毒を結晶させる。毒をいかにして抜いて行くか。ぼくは、そのことを考えて行かなくてはならない。

Ⓜ　考えてみれば、世の中のすべてのものには皮がある。まわりから覆われ、内側から押し上げられて出来上がる瘢のような皮だ。その存在に気付かない人もいる。そして気付いてしまう人もいる。ぼくは、今、自分のそれに気付いて慌てている。皮剝き器をくれ。けれども、ぼくは、それを手にすることが、まだ、出来ない。山野舞子を嫌いだと口にしなくなった時、ぼくは、それを手にすることが出来るのかもしれない。

それでは、秀美の山野分析はどのように修正されねばならなかったのか。次に引くのは、生徒たちが提出してくれた感想（いずれも部分）であるが、いま、これらを敷衍しつつ述べてみる。

ⓐ　山野が川久保と付き合えないのは背が低いせいじゃないと言われて、時田は自分の予想と違ってどう思ったのか。やっぱり少し見直したんだと思う。「やっぱり彼女は美少女だ」と言ったのも彼女を認めたからに違いない。　（隨原義次）

ⓑ　山野は人の好き嫌いを外見で判断するわけでなく、川久保がチビでなくムースのつけ過ぎで嫌いというのを読んで少しホッとした。山野はただもてたいだけであって性格は悪くないと思う。　（辻　裕尚）

身長の高低は「演技」によって変えようのない「外見」であり、「髪に、ムース付けるような男」や「口開けて、女に見とれてるような男」（引用Ⓚ）というのは、「演技」の「皮」によって覆うことの可能な「外見」である。換言するならば、いわば前者は不変の身体的条件としての「自然」、後者は（変容の可能な）内面から発露する「自然」であったと言えよう。だからこそ、

ⓒ　人間は、結局のところ、誰かを意識しているし、誰かに意識されている。だから、人が少なからず、みえや媚びというのを持っているのはしかたがない。かっこいい人はよりかっこよくなり、ださい人は今よりはかっこよくなろうとする。結局は表と裏の差の大きい人と小さい人に分けられるだけだ。僕は後者のような人間になりたい。　（若園敦司）

という生徒の感想が述べるように、「外見」もまた「努力」の問題であると自覚し実践していた山野は、天与の「外見」ではなく内的な「努力」を伴う「外見」を重要視したわけである。

自身の「皮」の存在に気づかされた以上、秀美は山野を改めて認めざるを得まい。山野の「自然」の「演技」を不快に感じつつも、一方で、川久保の「自然」あるいは「演技」の不十分さを高みから眺めていたところに、秀美の心の「不協和音」（引用Ⓒ）は発していたのであったから。そして、秀美の発見（引用Ⓛ）は、「媚や作為が嫌いだ」という自分とそれに媚びている自分、すなわち、自我

の中で対話しているはずの自己と他者――自分ともうひとりの自分――が、実は未分化なまま馴れ合い、癒着していたことの発見でもあった。

三

山野の「美少女」の「演技」も、秀美の「自然体っていう演技」も、まさに対他的なものとして成立している。人間が他者との関係性の中でしか生きられぬ以上、また時にその関係性の円滑化をはかる方策として「皮」や「演技」が必要とされる以上、完全に「自然」なままの自分であり続けること自体が難しい。多くの生徒たちが「皮」を全く身にまとっていない人間、「演技」を全くしていない人間など存在しないと感想文の中で述べている⑦ごとく、他者との関係性を排除したところに定位しうる自分などというものがそもそも想定しえまい。無論、秀美も自身の「皮」の存在を自覚するに至ったわけだが、「山野舞子を嫌いだと口にしなくなった時、ぼくは、それを手にすることが出来るのかもしれない。」（引用Ⓜ）という内言が示すように、いまなお秀美と山野の間には「皮」に対する処方をめぐって大きな差異が横たわっている。その差異について、次に引く生徒たちの感想は正しく言い当てているように思う。

ⓓ　山野舞子と時田秀美だったら、ぼくは時田のほうがいやなやつだと思いました。そのわけは時田は大人ぶっていて何でも知っているかのように話すからです。山野は自分が美しく可愛くなるための努力をしている。ぼくはそういうとこが好きだ。時田になんぼ言われようと。もし彼女ができたらきれいになる努力をしてほしいし、男だったら彼女にきれいになってほしいと思う。（林　祐司）

ⓔ　山野のすばらしい所は、ノートにも書いてあったが、完璧と失敗を隣り合わせて演技し、自然にふるまい他人の心を引きつけてしまうことと、人間をしっかり観察し自分がどう見られているか熟知していることだ。かなりすごいやつである。時田がそれを見破れたのは山野と同類であったからである。だが、時田はそれを意識していなかった。その点、山野はしっかり自分を知っていたので時田より山野の方が一枚上手だったような気がする。（輪島修平）

ⓕ　山野舞子の場合。同じく洞察力を持っているが、彼女は秀美とは違い、その洞察力を利用して、大衆に好まれる自分を作っている。それが彼女にとっての生きがいであり、人に好まれることによって、彼女は満足する。そして秀美が彼女から告白された時、彼女の演技を指摘するが、彼女からも同じ指摘をされ、なぜ周囲と噛み合っていなかったのかを理解するようになった。（豊福秀剛）

ⓖ　山野は自らの演技（個性の演出）を自覚しており、それにとまどいつつも実益を優先しているという点で時田よりも一歩進んでおり、そこにまで辿りついていない時田に言われる筋合いはない、という気持ちが彼女の怒りに多く含まれていると言える。（生井寛人）

前章の引用Ⓗと引用Ⓙから知れるように、山野舞子は学校の同級生たちとの関係性の中で、自分が振る舞うべき役割を明確に認識していたと言えよう。求められる「美少女」像（「人が自分をどう見

るかってこと」や「高校生の男がどういう女を好きかってこと」）を敏感に察知し、それを考慮に入れつつ、役割としての「美少女」像を演じること――そこに自我を同一化すること――が彼女の日々の努力の対象であったし、悦びでもあった。役割への自我の同一化は自我の喪失と裏腹であると見る向きもあろうが、山野の場合、「完璧」な雛形としての「美少女」像ではなく「ちょっとした失敗と隣合わせ」の「お茶目さん」という彼女なりの「美少女」像を創出し実践しようとしていたのである。

一方、前章の引用①で秀美が語った「たとえ話」は、他者が求める役割に同一化しようとして自我を殺している女と他者の視線など気にせずに自我を発露させている女との対比でもある。秀美の目には前者が「作為が肉体を使うこと」として、後者は「衝動が肉体を動かす」こととして映っている。そして、後者の実例として彼が想定しているのは、母親の仁子や恋人の桃子であった。

Ⓝ　桃子さんや母があっぱれなのは、その過程（引用者注・媚という毒を抜く過程）を知っているからだ。本当の自分をいつも見極めようとしているからだ。／ぼくは、何故か、その時、皮剝き器のことを思い出した。あれで野菜を削った時のように、ぼくのおかしな自意識も削り取ることが出来れば良いのに。そうすれば、ぼくの見せかけと中味が一致する日がきっと来る。

右の圏点箇所は、引用Ⓑの圏点箇所とリフレインのごとく響き合っている。もちろん、既に見てきたように、両者の間には自身を射程に捉えているか否かという明らかな懸隔があることは言うまでもない。秀美が問い続けてきた「皮」の問題は、社会的な関係性の中における役割から自我が自由であり得るのか否かという根源的な問いかけを孕んでいる。「まわりから覆われ、内側から押し上げられて出来上がる澱のような皮」（引用Ⓜ）は、まさに周囲との関係性と自己の内面との間に生成される。あくまでも作品世界の現時点において、それを他者と自己とをつなぐものとして捉えているのが山野であり、それは却って他者と自己とを隔てるものだと捉えているのが秀美であると考えれば、とりあえず二人の差異を説明づけることはできるだろう。

ところで、仁子や桃子は、秀美が直面した「自分に対する媚」という問題からはたして自由であり得ているのだろうか。無論、答えは否である。秀美の言によれば、彼女らは「媚という毒」を抜く過程を「知っている」わけだが、それでもなお不断に「本当の自分」を「見極めよう」とする過程を生きている。生徒たちの感想の中には、桃子の言葉を次のように理解したものもあった。

ⓗ　桃子さんが秀美に言った「皮を剝く必要のない自分を知れれば素敵よ」ってのは皮を完全に取り除いた状態を言っていたのではなく、ある意味では言い方が悪いかも知れないが、自分の気に入った皮を見つける

事ではないかと思う。どうしてそう思ったか……、最後のプリントの最後の行、彼女はさりげなくだが媚びを見せた。

（和田新介）

ⓘ 「自意識」というのは人間にとって不必要なものだろうか。僕はそうは思わない。時田秀美が「ぼくの自意識も削り取ることが出来れば良いのに。」と言っているが、それは「自意識」をマイナスにしかとらえていないからだ。もし人間が「自意識」を全く失えば、それは自然体というよりも、「理想の自分に近づくための努力を放棄する」という事になるのではないか。「自意識」をプラスにとらえることができた時に、桃子さんの言う、「人の視線を綺麗に受け止めることが出来る時期」が来るのだろう。

（鰐渕雄平）

秀美はいま「まわりから覆われ、内側から押し上げられて出来上がる澱（おり）のような皮」が内包する「媚という毒」を抜くこと、すなわち「おかしな自意識」を削り取って「見せかけと中味が一致する」ことの端緒を得たばかりである。それは、とりもなおさず、「媚」や「演技」による隔てのない自我、さらには他者とのそんな関係性のありようを模索する作業の始まりでもある。

生徒感想ⓙが指摘するごとく、秀美もまた周囲の「アドバイスをしてくれる」人々との対話を経ることで、右のような結論に辿（たど）り着いた。もちろん、作品世界の範囲では開示されないものの、山野にしても、秀美との対話を経た後（あるいは今後の人生の何らかの場面において）現在身にまとった「皮」を窮屈に感じる時が来るに違いあるまい。人が他者との関係の中に生き、新たな出会いを不断に続ける限り、古い「皮」を脱ぎ捨て新しい「皮」を身にまとう作業は繰り返されていく。だとすれば、自我とは揺るがぬ確固とした様態ではなく、ある種の動態として人生の様々な場面において常に何らかの行為の中にたち現れてくるものであろう。感想ⓚが「不満」や「不安」の語で捉えているのは、人が成長過程で出会う様々な発達段階上の課題であると言い換えることも可能なはずだ。

ⓙ 僕は、何をかくそう、山田詠美の隠れファンなのです。この作者の特徴（授業でやった分しかわからないので、偉そうなことは言えないのですが……）として、成長期の子供とか、いつも周りよりちょっと感性の違う人が出てきて、その人にアドバイスをしてくれる人が出てきます。

（鳥居南圭吾）

ⓚ 山野に指摘されたのはさぞかしショックであったと思う。自分の嫌いであった演技を自分が使っていたこと、それが同時に原因の解らなかった自分の欲求不満の正体であったことを知ったから。秀美にとって抱えていた不満が取れたということは喜ばしいことであろう。しかし、このことによって秀美はまた、新しい不満を持つのではないかと思う。人と不満というものは、切り離すことができないのだろう。自分も常に不満や不安を抱えている。一つ解決すれば、また一つあらわれる。そのことで常に苦しむのだろう。

（池田直哉）

秀美と母親、秀美と川久保、秀美と山野といった対話の諸相を眺めてきた生徒たちが、次教材である井伏鱒二『山椒魚』のラスト・シーンにおける山椒魚と蛙の反復される対話と最後の和解、あるいは閉塞（へいそく）状況に置かれた両者の関係性をいかに捉えるのか。『賢者の

皮むき』の授業において私の準備した第二の《仕掛け》は、『山椒魚』を《読む》ことに向けて作動する。

※　生徒の感想文の引用に際しては、明らかな誤字・脱字を訂正した以外は、すべて原文のままとした。また、『賢者の皮むき』の引用に際しては、山田詠美『ぼくは勉強ができない』（新潮社、一九九三年）収載本文を用いた。ただし、いずれの場合も、圏点は引用者が私に付したものである。

※『ぼくは勉強ができない』の文庫版（新潮社、一九九六年）に付された著者紹介は次のようになっている。

山田詠美（やまだ・えいみ）　一九五九（昭和三四）年、東京生れ。明治大学文学部中退。八五年『ベッドタイムアイズ』で文藝賞受賞。同作品は芥川賞候補にもなり、衝撃的なデビューを飾る。八七年には『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』で直木賞受賞。さらに、八九年『風葬の教室』で平林たい子文学賞、九一年『トラッシュ』で女流文学賞、九六年『アニマル・ロジック』で泉鏡花賞を受賞する。現代を代表する人気作家である。

注

① 私の勤務していた大谷高等学校（京都市東山区今熊野池田町）は、中学・高校一貫制のバタビア科と高校普通科を有する私立の男子校である。一九九六年度に私が担当したのは、高三・普通科の「現代文」（四単位）三クラスと、高三・普通科の「古典」（三単位）一クラスであった。

② 例えば、教育解放研究会編『学校のことば　教師のことば』（東方出版、一九九四年）は、学校・教師の外皮――いわば制度化した言説や行為――を教員自身の位置から捉え返そうとする試みであったと私は思っている。

③ 一九九六年度の最後に実施したアンケートの「今年度の現代文の授業で、一年間通じて一貫していたテーマは何だったと思いますか。」という問いに対して、次のような回答がかなり見られた。「この一年間の教材に一貫していたテーマとは、おそらく『本当の自分とは何なのか』ということであると思う。しかし、一年間でわかるようなことではないと思うので、今後も『本当の自分』を探し続けなければならないと思う。」（岩本直也）、「テーマは、自分を見つめるというか、これから先どのように生きていくべきかを現代文を通じて学んできたような気がこの一年間でしました。」（津曲一範）など。

④ 一九九六年度の高三・普通科「現代文」の年間テーマを、《「他者との関係性」と「個体（生命）の尊厳」の発見》としたのは、前々年度・前年度（すなわち、同じ生徒たちの高一年次・高二年次）に引き続いてのことである。いまの思春期における自我について、例えば、庄井良信「思春期相談のアンソロジー」（『学びのファンタジア――「臨床教育学」の新しい地平へ』、溪水社、一九九五年）では、

　ともに生きる活動から疎外されると、人間は対象認識があいまいになり、対人認識があいまいになる。その結果、自己認識（自己イメージ）があいまいになる。ともに生きる活動から疎外された人間は、雲のなかにぷかぷか漂う自己感覚にどっぷりつかってしまうことになる。（中略）対象＝対人喪失による無力感から他者像がぼんやりしているために、自己像もぼんやりぼやけている。このボヤボヤしたものどうしがわかちがたく癒着しあい、どろどろにとけあう状態が、宙づりの自我を構成している。

というふうに捉えられている。こうした自我のありようは、私たちが学

校現場において生活指導上の様々な《事件》に遭遇する度に実感してきたことでもあった。

⑤　プリントと単行本収載本文の対応箇所（頁・行）、および全体の段落構成（頁・行）を示すと、それぞれ次のようになる。

◎プリント1＝132・1～135・9　▽第一段落＝132・1～134・16
◎プリント2＝135・10～139・1　▽第二段落＝134・17～136・15
◎プリント3＝139・2～142・9　▽第三段落＝136・16～139・13
◎プリント4＝142・10～146・1　▽第四段落＝139・14～142・4
◎プリント5＝146・2～148・10　▽第五段落＝142・5～148・10
◎プリント6＝148・11～150・7　▽第六段落＝148・11～150・7

⑥　このような授業形態の意義と狙いについては、拙著『《読み》のたちあがる場をめざして』（教育出版センター、一九九七年）の中で述べている。

⑦　その例としていくつかの感想をあげておこう。「この作品を読んでいる最中に、秀美と自分が何か似ているような気がしてきた。僕も今までは演技しているとは考えもしなかったが続けて読んでいくうちに僕も演技していたのかと気づいてきた。しかし人は何らかの形で演技が必要とされ、演技をしていかなければならないと思う。」（奥田安之）、「誰でも少しずつ違う自分をよそおっていると思う。でも、それも自分であって、本当の自分と演技の自分を全部ひっくるめてその人の性格であり、本質であると思う。この勉強で、ぼくは自分もなんらかの演技をしているのではないか、と考えさせられた。」（田中信博）、「みんな誰しも、心の皮は持っているはずだ。悩める時田秀美君は、見せかけの自分と本当の自分を一致させるには、自意識を削り取ることだと考えた。そして僕も考えた。皮をむき終えた心の中身を。……無かった。空虚だった。まあ実際、そう簡単に自分の心は見えないだろう。かく言う僕も心の中はわからない。しかし、演技はしている。でも僕はそんな自分が嫌いではない。むしろ好きなくらいだ。皮も中身もすべて、僕の一部なのだから。」（川村友彦）など。